ナイトメアゲーム

JISTICE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトメアゲーム

【Nコード】

N4997Y

【作者名】

J I S T I C E

【あらすじ】

特には何もナシだよ。

まじめにアホな戦いをしろ!!

プロローグ

俺の名は、藤堂秀樹。学校では「どつちつかずの秀樹」という通り名で呼ばれている。通り名のとおり、アホなんだか真面目なんだかよくわからない性格だと言われている。ちなみに、今は同じ中学校に通う「常にアホみたいな狙撃手」の榊龍平、「真面目すぎる突撃兵」の御剣怜侍といっしょに大人気オンラインゲームの「ドリームクライシス」というゲームをやっている。何となくファートパーソンシューティングゲームに近いのだが、一般的に「突撃兵」「狙撃手」などの職種以外に「格闘家」「魔導師」など様々な職種がある異色のゲームだ。ちなみに、俺たちはこのゲームでは上位に入る有名なチームに入っていて今も大事なチーム戦をしているのだが、母にはあまりよく思われていない。

「秀樹、いつまでもゲームやってないで早く寝なさい!」

ほら、母の怒声が飛んできた。これが毎日うるさいのである。

「わかってるよ!後五分だけ!」

このチーム戦で負けたら俺たちのチームレベルが上がらないのだ。集中してプレイするが、スナイパーに狙撃されて、待機状態になっってしまった。

「あああ!?!?やばい!?!?やばいつてえ!?!」

そのとき、画面には悲しい文字が表示された。たった19文字が俺の気分を青一色に染める。

「制限時間です あなたのチームは負けました」

たったこれだけの文字が俺を悲しい思いをさせる。顔から血の気が引いていった。

「ああっ、後ちょっとだったのに……くそあっ!?!」

俺はがっくりと首を落として、パソコンの電源を落としベッドの上

「なんでこんなところにオオカミが!？」

俺は、反射的に構えた。それでも、中1の時から空手を習っていたのだ。オオカミは、3匹ともゆっくりとこっちへ歩いてくる。

「ん?ちがう!3匹じゃない。1匹のオオカミだ!いや、3つ首はケルベロスか」

そうなのだ。オオカミは、3つの首を持った1匹のオオカミだったのだ。いや、だからケルベロスだって。俺を裁きに地獄の番犬が現れたのだ。番犬じゃなくて番狼か。何も悪い事してないよ!オオカミさ!ん。

「ケルベロスは別に興味ないんだけどなあ、夢に出てくるなよ……」

アオオオオオオオオオンン!!!グホッ、ゲホゲホッ!?ウゲエッホ……

「咳き込むなよっ!?!ださっ!！」

まるで、覇気が込められているような大音量の遠吠えだった。迫力でいうと例えばライオンが目の前にいきなり現れたぐらいの恐ろしさなのに……咳き込んでしまったせいで思いつきりださくなってしまった。アホみてえ。そう思っていた束の間、ウルフケルベロスは、こちらへ走ってきていた。

「ちよつと早すぎるだろ!?!」

100mは離れているはずだがもう近くまできている。5mはあるだろう巨体が軽やかに疾走してくる。しかし、顔が変顔になっているので格好いいんだかださいんだかわけのわからない。どつちつかずの俺のようだ。

「ああもう、走る速度もサイズ何かもわけわかんねえ!」

ドオン!!

ギリギリまで引きつけて、ケルベロスの顎を思いつきり殴る。

「ウガッ!?!」

ケルベロスの顎に直撃したはずだが。奴は止まらない。まるでほと

んど効いていないようだ。というような真面目な感想を言っている間に、残りの二つの顔が襲いかかってくる。

「うわああ!!」

ケルベロスは残りの二つの首の猛攻を避けると、前足を振りかざし殴りつけてきた。アッパーの型で俺の体に襲いかかってくる前足は、俺の腹部に直撃した。まるでドラム缶を殴ったような鈍い音がして俺の体は宙に浮いた。一瞬意識が遠のいたが、壁に叩き付けられて意識を取り戻す。俺を睨めつけてくるケルベロスの目を見ると俺は気を失った……

しばらく意識を失っていた後、俺は気がついて現実世界へ戻されて覚醒した。

「うわああああああああああああ」

俺は飛び起きた。飛び起きるときにベッドから落ちて頭を打ってしまった。

「はあ。はあ。ここは、俺の部屋？」

ひどく息が荒れている。息を整えてから辺りを見回すとここは俺の部屋のようにだが、天地がひっくり返っている。

「いや、俺がひっくり返っているんだ。」

体を起こして今の夢の出来事を整理してみた。

「今のは夢? いや、夢の中で既にこれは夢だと気づいていたぞ!? ああもう、変な事ばかりじゃん。はっ、体には何ともないみたいだな」

そして、俺はまた気を失った。ハイテンションでこの状況を解釈しようとしてしまったために力尽きてしまった様だ。おそらく、アホみたいな顔で寝ているのだろう。

あの変な夢を見た翌日、学校に行つて放課後の学校で龍平たちにその話をした。

「何だ、お前も見たのか、そんな変な夢!? アホみてえな話だな」

「お前もつて、龍平も見たのか? まあ、アホのお前には言われたくないがな」

ハハハハハ、と怜治が高笑いをして、腹を抱えている。

「ひいつひ……ああ腹が痛え」

怜治はその場に倒れこんでまだ笑っている。

「もしかして、なにかドリームクライシスと関係があるんじゃないか?」

「ヘイ! 龍平。俺もそう思っていたところだぜ。でも、何で全く同じような夢を見たんだ?」

龍平はみんなからアホといわれているがたまにいいことを言う。

「だからつて、ここで考えても始まらないんじゃないか? もしかしたら、たまたまみんなが同じ夢を見たつてもあるんじゃないか? もし、今日も同じ夢を見るのであれば、それは確かにおかしいけれども……」

「ナイスだ、怜治! お前のそういう意見を待っていたぜ! ! じゃあ、今日の夜見た夢を明日教えてくれ。そしたら何かわかるかもしれない。」

俺は2人にそう話して家に帰った。今日は、ドリームクライシスをする気にはなれないのですぐに寝ることにした。が、なかなか眠れない。しばらくパソコンをの電源を入れてドリームクライシスの攻略サイトを見ていたが、机に向かったまま眠ってしまった。

そして、夢の中へ

案の定、上空10mぐらいの場所に投げ出されて、俺の体は地面にたたきつけられた。太陽の位置からして昼の1時頃だろう。太陽光に焼かれたアスファルトは恐ろしい温度になっていて、俺の体を焦がす。

「毎回はいやだよ……また同じところか」

昨日と同じ学校の前だ。ただし、昨日と違うところは龍平と怜治がいることだ。

「龍平、怜治、なんでここにいるんだ？」

「それは俺が聞きたいよ。俺の夢の中に秀樹と怜治がいるんだもん。俺はついにアホになったのか？」

「お前はもとからアホだ」

怜治はまた笑い始めている。ひとつ言っておくが怜治は笑い上戸なのだ。まじめすぎるために笑うときはアホみたいな顔で笑うのだ。

「っ！！」

突然の頭痛がして、目の前が真っ白になった。次の瞬間何もなかった。次から声が聞こえてきた。

「皆さんそろいましたね」

機械的な声がした。

「うわっ！？だれだ、どこにいる！？」

龍平も動揺しているようだ。怜治は、まじめにその場に立っている。しかし、この声は聞こえているようだ。

「私の事はDMと呼んでください。私は今あなた方の頭の中に直接話しかけています。テレパシーみたいなものですね。」

謎の声の主はDMと名乗った。声は男の声なのに、どこか女性を感じさせる声だ。

「お前はいつたい何者だ！」

怜治が問いかける。焦っているようで、実はとても冷静だ。いつもの怜治ならばの話だが……

「私は、夢と現実の間の世界の支配者です。まあ、この世界はほとんど夢見たいなものです。あなた方には、夢の中から現実世界へやってくるダークマターと呼ばれる悪魔を倒してもらいたく、この世界へ呼びました。皆さん同じ夢の中にいると思ってください。」
「なんだか夢みたいな話だ。いや、この世界は夢の中か。今起きている状況を整理しきれない。やはり混乱しているのだ。」

「夢と現実の間の世界！？なんで俺たちなんかをこんなところへ呼び出したんだ！」

「この世界は、ドリームクライシスをやる人間しか入れない世界なのです。ドリームクライシスと同じような世界でしょう。わかりますか。」

「わかりません」

間髪入れずに龍平が答えた。アホ〜。

「ところで、昨日のあ……」

「それで、昨日のはいったい何なんだ。」

怜治君。ナイススクエスチョン！！てゆーかその質問俺がしようとしたんですけど〜……

「あれは、この世界のことを感じてもらう模擬戦闘です。あの悪魔は、幻覚みたいなもの、ダメージなどは……私が透明術を使ってこつそり殴っていたんです」

「じゃあ、あれは偽物ってことか。それより、こつそり殴るなよ……昨日みたいに、倒されてしまったらどうなるんだ？」

心配性の龍平が問う。それにしても目に見えないDMにしゃべりかけているので、毎回毎回首を回しながらしゃべらないといけない。

「あなた方が体験したことと同じです。この世界で気を失ったら、現実世界に戻って覚醒します。普通の夢ではないので現実の世界に戻っても夢の記憶がなくなるということはありません」

「つまり、命も記憶も無くなるということは無いんだな？なんだむつちや安心して戦えるじゃん……」

龍平は安心して顔の表情を緩める。怜治も息を吐いて、構えていた構えていた銃をしまった。

「そうです。だからって気を抜いて戦ってはいけませんよ。アホみたいに戦うのはいいですが……」

意味の分からないDMの言葉にこの場にいる全員が目点を点にした。

「どういう意味だ！？」

「インデュアルという「真面目さ」が高いほどその技の能力が高く

なる数値がこの世界にはありません。これは、この世界で使用される技に付いた数値で0から始まって100まで。数値が高いほど技の威力は上がります。しかし、技が全く真面目な技でない場合……アホみたいな技の場合数値はマイナスになります。この場合、-1から-100まで。数値が低いほど技の能力は上がります」

何と、この夢の中ではまさにアホみたいな能力が使えるのだ。真面目な技じゃないと高威力は望めないが、アホみたいな技でも高威力の技ができるのだ。考え方によれば、どんな人でも活躍できる場となるのだ。

「その……技はどうやって放つんだ？」

もちろん、どうやったら技の威力が上がるかがわかってても技の使い方がわからない。俺たちはただの一般人なのだ。

「真面目そうな技やアホみたいな技を頭の中で創造して、それを使おうすればその創造した技を放つ事ができます。ドリームクライシスというゲームの技も使用できますよ」

やっぱり、この夢はドリームクライシスが関係しているようだ。まあ、ただの夢みたいだし、そのうち理由はわかるだろう。

「ところで、こんな武器でダークマターと戦う事ができるのか？おれは拳だし……」

「技の威力が上がれば武器自体の威力も上がります。もちろん、身体能力も飛躍的に上昇しますよ」

そうして、目の前はまた元の学校のある風景が見えてきた。

「では、ご健闘を祈って」

最後に、そういう言葉が聞こえてきた。

「おい秀樹、そんな簡単に引き受けていいのか？俺怖ええよ……」

心配性すぎる龍平は、こちらに半分泣き目で見てくる。

「何心配してるんだ龍平？別にただの夢だと思えばいいだろ。みつともねえぞ？」

「確かにそうだけど……」

俺は、龍平の頭をつかんでガシガシとなでる。龍平はものすごい

ケルベロスは、こちらに向かってきて走ってきた。

「いきなり突っ込んできたな!!」

ウルフケルベロスは右前足を右から薙ぎ払うように叩き付けてくる。その迫力はものすごく、体は勝手に硬直してしまうが、いやでも動かさないといけない。それでもしないと、目の前に現れた巨大な物体が俺の体を叩き潰すであろう。

龍平は右に走り、怜治はケルベロスの真上の方へ跳んで避ける。地面にくっついてしまったような重たい足を動かし、俺は、左方向に走る。

「これでも食らえっ!!」

跳んで避けた怜治は、空中で2回転して軽やかに着地し、手に持ったアサルトライフルをケルベロスの胴体に打ち込む。

自動小銃通常射撃

インデュアル

ID +7

目の前にこのような数値が表示される。全員空中にいきなり表れた数値に一瞬驚いたが、すぐに一体何かを理解した。奇襲などには慣れているのだ。

「おい、秀樹も何かアホみたいな技でもやってみるよ!」

「アホみたいな技って言われても……」

ウルフケルベロスは俺たちの事情なんかどうでもいいというように左足を殴りつけてくる。その左足は確実に俺を補足しておりさっきの攻撃より速度が速い。

「俺の方がよっ!?!」

俺は、そのまま走り続ける。かなりの速度で襲いかかってきた左足は、アスファルトを砕き地面に大穴があいた。アスファルトの破片が俺たち3人に襲いかかってくる。

「あ、あんなもん直撃ひとたまりも無いぞ……」

その時、龍平はウルフケロベロスの左頭部に弾丸を撃ち込む。

狙撃銃通常射撃 ID +10

ケルベロスの左頭部がスナイパーライフルの弾丸の衝撃に押されて、

中央の頭部と激突する。ケルベロスは叫びはしたものの左頭部はまだ動いている。どうやら無事なようだ。無事じゃない方がうれしいんだが……よく見てみると、ケルベロスの体中に生えた体毛が弾丸を止めていた。恐ろしいほどの固さの体毛だ。

「どんだけ固いんだよっ!？」

龍平は射撃を続けながら驚きを口に出す。さっきまでのびくびくしていた龍平とは違い、目は本気になっている。

「秀樹っ！何かアホみたいな技は無いのか？せめてあいつの体毛をどうにかしろ！」

「怜治、こつちだつて考えているんだよ！ん、待てよ、体毛をどうにかすればいいんだろ……と、言う事は」

俺はある事に気づいた。あいつの体毛をどうにかすればいいのだ。ならば、抜いてしまえばいいのだ。俺は空中に跳び、技を創造しながらケルベロスに目標をあわせる。

「炎刑奪毛掌!!」

技名を叫びながら、右拳で突撃しながらケルベロスの右胸を殴り付ける。拳に炎が迸り、ケルベロスの体毛を焼き焦がす。突き出した拳を中心に円形にケルベロスの体毛が燃えて落ちた。

炎刑奪毛掌 ID - 58

「すげえ、- 58を記録したぞ……」

怜治が珍しく感嘆の声を漏らす。他人を褒める事はまず無い怜治が俺を褒めたのだ。

「いいところあるじゃねえか、怜治」

はっ、よく考えてみたら俺のアホな所を褒めているみたいじゃないか。怜治の方を見ると、ニヤけ顔で笑っていた。

「あのヤロ〜！」

俺が怜治の所にいこうとするとあわてて龍平が声をかける。

「ナイスだ、秀樹。おい、怜治も攻撃を続けるぞ!!ケルベロスは……アホみたいな事やっている。チャンスだ!!」

ケルベロスの方を見ると、毛が無くなった事にショックしたの

か、首を下に傾けて、右顔は体毛が抜けた部分をなめている。目には涙のような物が浮いていてさっきまでの迫力はほぼ無い。

「アホかあ!!」

つい思いつきり突っ込んでしまった。今までの異性はほとんど無くなったケルベロスは、ただ首が3つ付いた犬だ。

「秀樹っ！とどめを刺すぞ！なんか強そうな技を考えてくれ」

「怜治……お前、俺にアホな技を考えると？」

「いいから頼むっ！細かい事は気にすんな」

怜治は手を合わせてよろしくっ！という感じだが、顔は半分笑っている。

1章 2

その時だった。ケルベロスが体毛を奪われた怒りを拳に込めて恐ろしい速度で殴ってきたのだ。まるでボクシングのストレートのような真っすぐな右前足の突きが、俺の体を貫こうとする。俺は軽々吹き飛ばされて学校の校舎の壁に叩き付けられた。あまりにもリアルな死の恐怖に俺の意識は遙か遠くに吹き飛んでしまったような感じがする。

「秀樹!!」

龍平と怜治の声が聞こえてくる。しかし、意識が薄れていく中それはただの音としか認識できなかった。ケルベロスの攻撃は止まらず、そのまま左足で地面をえぐりながら下からアップパーしてくる。もうただの狼の動きではない。身動きのできない俺に向かって強力な一撃が入る。俺の体は、1階の天井を突き破り、2階の天井に体がめり込んだ。衝撃で窓ガラスにひびが入り、所々割れている。

「こんな所で倒れてたまるかってんだ」

俺の体は天井から抜け落ちて2階の床に落下する。鈍い音がし、ガラスの破片が飛んでくる。外では龍平たちが戦っているのだろう。

「痛ててて……う、はあ、はあ……」

薬品の強い刺激臭がする。ここは理科室のようだ。その刺激臭に目を覚まして、周りの状況を確認する。

「どこのドラマの展開だよ……」

ぼんやりとしか見えない目で自分の体を見てみると真っ赤に染まっており、所々黒い点が付いている。血に砂粒などがこびりついているのだ。顔に付いた血は固まっており、べっとりとした感覚がある。

「なにか武器になる物はないのか……」

俺は壁に体を預けながら辺りを見回した。

その時、外から龍平の声が聞こえてきた。喉から絞り出した乾ききった声だ。

「秀樹、すまねえ、今そつちに奴が行った。武器を持って戦え。お前の武器はその頭だ。その頭を最大限使えば……」

龍平の声はそれが最後だった。

龍平の声がした後、ケルベロスはガラスを突き破ってやってきた。

俺は反対側の窓際に立って構えた。頭の中では、技の創造を続けている。難しい技だ。

アオオオオオオオオオンンン！！！！

あいからわずすごい遠吠えだ。3つの首から放たれる遠吠えは残っていた全ての窓ガラスを破壊して圧倒的な存在感を放っている。足が震えている。これは武者震いなのか、恐怖なのか……

「これがとどめの一撃だ。これ以上俺の前に立つなよ……ファーストフェイズ」

そう言っただけケルベロスの方を見ると、体中から風を生み出した。周りの空気を完全に支配した俺は、暴風を巻き起こした。ケルベロスは暴風に乗って天井を突き破りながら上空まで巻き上げられる。

「疾きこと風の如くう！！」

そのまま天井の穴を抜けてケルベロスのもとへ跳ぶ。その行動に音

は無く、さつきとは逆で風はほとんど起きない。

「徐かなること林の如く……」

ケルベロスの真上まで跳ぶと、次のフェーズへ移行する。

拳には炎が迸り、ものすごい勢いでケルベロスに殴り掛かる。連続で打ち込む拳からは火炎弾が放たれる。火炎弾の軌道は変化して、ケルベロスに向かっていく。

「侵掠すること火の如くう!!!」

さすがのケルベロスも火炎弾を受けるだけではなく反撃に出た。空中では無いような自由な動きで前足を繰り出してくる。俺は手をクロスさせて防御の体勢に入る。

「動かざること山の如く……」

繰り出された前足は、俺の目の前で止まった。魔法でできたような壁が俺の前に現れたのだ。前足の衝撃を吸収してケルベロスに弾き返す。ケルベロスの巨体が地面に落下したことにより、地震のような地響きが起きた。大きな音をたてて校舎が揺れる。あれだけの攻撃を受けておきながらもケルベロスはまだ立ち上がった。こちらに向かつて飛んできてもう一度攻撃を加えようとする。

「こんだけ攻撃を食らっておいでまだ立つとはちよつとシヨックだな。追加フェイズだ」

俺はただ冷静に。冷静に対処する。

「知り難きこと陰の如く……」

その瞬間俺の体は闇に紛れた。ケルベロスは俺を見失い、あたりを見回している。

俺は、体の中に秘めた力を瞬間的に爆発させる。拳には雷が迸りケルベロスに向かって突撃する。

「動くこと雷霆の如しい!!!」

巨大な雷となった俺の拳がケルベロスの胸に直撃し、衝撃で地面にひびが入れる。電撃はケルベロスの体内に迸り、周りを電光で埋め尽くす。

「これで終わってたか……？」

電撃の拳を食らわせた後、後ろへ引いて様子を見る。ありったけの攻撃を食らっていたケルベロスは右頭部を失いながらもまた立ち上がった。体中血まみれになっていて、右前足も負傷して3本の足だけで立っている。もはや生きている事すら怪しいが、確かにそこには奴がいるという存在感がある。

「そこで待つてな……ラストフェイズだ」

足に力を溜めて瞬間的にケルベロスの両顔を掴んだ。

「一瞬のうちに滅ぼすべしっ！！」

俺の手の先からものすごい闘気が発せられて、ケルベロスはその場に崩れ落ちた。体にダメージを与えたわけではなく、俺の体から発せられた闘気がケルベロスに精神的ダメージを与えて奴の立っている力を完全に無くしてしまったのだ。

風林火山陰雷滅 ID +92

ケルベロスは、倒れた。俺も、倒れた。体は、動かない。力を使いすぎたのだ。

「くそ、龍平たちもダメージを負っているはず……あいつらの所へ行かないと……」

重たい体を持ち上げる。たださえ恐ろしいほどのダメージを負っているのだ。さっきの技の反動もかなりすごいのだ。全身を使って立ち上がるうとするが手に力が入らず、立つ事はできなくなってしまう。

「秀樹、大丈夫か……」

その時、龍平と怜治が銃を杖にして歩いてきた。全身怪我していてもやぶれている。

「龍平、怜治……あいつ、やっつけたぞ。いくら死ななくてもひどい怪我だと辛いな」

倒れたケルベロスを見た龍平と怜治もその場に倒れ込んだ。ケルベロスが倒れた事によって安心したんだろう。

「2人とも大丈夫か!？」

2人とも、安心した顔で眠っている。相当ひどいダメージだったんだろう。精神的疲労もたまっているはずだ。

「何だよ、心配させやがって……」

俺も眠ってるうとしようとしその瞬間、突然の頭痛がして目の前が真っ白になった。あいつの声が聞こえてきた。

「秀樹さん。ご苦労様でした。2人は眠ってしまったようですね」

「DM、どうだ倒したぜ……」

喉が渴ききついで、かすれた声しか出ない。

「ありがとうございます。またダークマターがこの世界に現れた時は、秀樹さん、そして皆さんよろしくお願いします。では、私はこれで」

目の前が元の世界に戻ろうとする。

「お、おいちよつとまで。まだ聞きたいことがたくさん……」

そして、また頭痛がして周りは完全に元に戻った。

「なんなんだよ。すぐ消えやがって……」

全て終わった後は風が心地良く、さっきまで照りつけていた太陽光も、今となつては暖かい日差しとなっている。目の前の世界はどんどん薄くなっていく。俺の体から小さな光がたくさん飛んでいき、俺の体は薄くなっていく。

「ってどうなっているんだ!?!？」

いきなり起きた出来事にわけもわからなくなってしまった。

うわあああああああ!?!?!??

気がつくのと、さっきまでとは別の世界にいた。心地よく吹き抜ける風も、照りつける太陽光も無い。

「はっ!?!」

辺りを見回すとどこかで見たとことのある部屋だった。体中にべつと

りとした感覚があるが、血のような感じではない。おそらく寝汗である。

「ここは俺の部屋？」

そういえば、この前もこんな感じで起きたもんな。体が軽くなっている。傷は全快して格好桃との寝巻き姿になっている。

「でも、なんか疲れたなあ」

どうやら精神的疲労はとれていないようだ。俺はもう一度寝ることにした。目を閉じると、麻酔をかけられたように意識は遠のいていった。

2章 1

「……またしてもひっくり返っているのか？」

目の前は真っ黒になっているが、確かに頭に血が上っている感覚があつて腰や首が痛い。

「ベッドから落ちているのか……」

首をあげると、頭に布団がかかったままベッドの下で海老ぞり状態で寝ていたのだ。頭は汗で寝癖が付いていて、首の辺りが痛い。

「あれ、昨日の夢のせいかな……？」

実際は寝違えただけだ。首の筋が痛くて首を回しながら制服に着替えてリビングへ移動する。母が待っていて眠そうな顔をしている。

「秀樹。あなたやけにうなされていたわね。うるさかったわよ？」

「ああ、ごめん。じゃあ学校行ってくる」

そう言って家を飛び出す。颯爽と走っているが、やはり首が痛い。途中で首を押さえながら学校への道を走っていく。

学校では怜治が待っていた。

「よう、優等生。朝は早いな」

「僕は真面目なだけだ。テストの結果は……」

怜治は真面目なくせに頭もいいが、ダメな部分も多い。

「それ以上は黙っていていいぞ。どうせよかつ……」

「それに関してはノーコメントでよろしくお願いします。」

怜治が俺の口を塞いで話を断ち切る。そのとき、龍平が3年生の学級練に入ってきた。

「おっはー！」

大きな龍平の声が教室に響く。

「龍平、昨日みたいにびくびくしながらくると思っていたのに……つまりないなあ。後、『おっはー』はもう古い。」

「そうだな。昨日の俺とはちがうのさ。そうだ、ひさしぶりにドリムクライシスでもしようぜ！」

突っ込まれた事は気にせず龍平は話を進める。怜治もあきれた顔で溜め息をはいている。

「立ち直るの早いなあ……まあいいや。じゃあ今日の8時からやるうぜ。」

「ねえさ、僕もやらしてくれない。」

いきなり後ろから話しかけられて、一瞬びっくりしたがそこにはおとなしい感じの顔の人物が立っていた。

「ん、お前は……えつとー、ああ4組の裕一郎じゃん。お前もドリムクライシスやってるのか？」

「うん。昨日始めたんだ。いっしょにやらない？」

「いいじゃん。2人もいいよな。」

2人はうなずいてから答える。

「俺たちはいいぜ。」

「じゃあ、また後でね。」

裕一郎は自分の教室に戻っていき、俺たちも教室に入った。

その夜、俺はみんなを待った。龍平、怜治、裕一郎、そして見知らぬ3人が入ってきた。大和、翔、修平という名前のプレイヤーだ。チーム名は「三銃士」となっている。

「だれだ、こいつら？チームは同じだけど『三銃士』なんて名前の

クランいたかな？まあいいや。戦闘開始と。」
そう言つて、戦闘開始のボタンを押した。

それから15分後。

結果は散々だった。侍の大和と翔、魔導師の修平たちの完全勝利だった。裕一郎はまだしも俺たちさえも全滅した。最後は、大和と翔だけ生き残つて制限時間になった。

「強い…何だこの大和と翔つてのは！？それに銃じゃなくて刀使つてなかつたか！？」

というか、そもそも姿すらまともに見えなかった。俺は、ランキングでも10番以内には入る事もあるトッププレイヤーなのに、こんなに強い奴初めて見たな。そもそも、刀より銃の方が有利なのになんで負けてしまうんだ？それに、なんでこんなプレイヤーが無名なんだ？

「明日みんなに聞いてみるか。」

俺は、寝る事にした。

そして、夢の中へ。

今日も、また学校の前か。しかし、昨日は昼だったのに対して、今日は夜だ。

「よう、怜治。」

「秀樹。今日も戦うみたいだな。」

「ああ。それよりさっきの大和と翔つて何者か知らないか？」

「多分初心者ランキングトップの二人だ。銃はハンドガンしか使わず、ナイフと刀で戦う奴らだ。」

「すごい奴らだな、どうりで強いはずだ。」

「そういえば、大和と翔つてどっかで聞いた事のあるような…」

「何か心当たりがあるのか？龍平？」

そういえば、俺もどこかで聞いた事のある名前だ。
そして、突然の頭痛。

「みなさん。そろいましたね。」

「よう、DM。今日はさっさと終わらしてくるよ。じゃあ行ってくるな。」

「ちょっと待ってください。今日は、緊急事態です。」

「いったい何があったんだ？」

「これは、ある人の模擬戦闘中の夢の中です。ところが、本物の強力なDark Matterが多数出現してしまいました。」

「何だつて!?とところで、それは俺たちには倒せるのか？」

「わかりません。そこで、特殊な兵器を使えるようにしています。」

そちらの角に、特殊なRPG-7を入れた箱を置いてあります。対Dark Matterカスタム済みです。また、もう1つのクラムも援軍にきています。まだ到着していないようなので、皆さん急いでください。」

「わかった。よし、みんな行くぞ！戦闘開始だ!!」

「おう!!」

頭痛がおさまってきた。

「にしても、強力なDark Matterってなんなんだ?しかも多数出現てヤバくないか？」

「とりあえずRPG-7を回収しよう。あそこにあるはずだ。」

角の方に大きな箱が置いてあって、中には7つのRPG-7が置いてあった。

「あと2つ余るってことは、援軍のクランは2人だけか。」

「とても強い人たちだったらしいな。」

その時、向こうからやってくる気配に気づいた。

「そういえば、向こうから足音が聞こえてくるのに気づいたか？」

「あっちの方から何かくるな。それもたたくさん。」

何か走る音、ゆっくりとした足音、うめき声などが聞こえてくる。
「あそこからくるのは…裕一郎？模擬戦闘ってあいつのやつか!？」
「わっ、みんななんでここにいるの?」

「裕一郎。お前は、下がってる。後ろの奴らは、俺たちがどうにかしてやる。」

こんなことを言っている間でも、足音は大きくなってきている。

「う、うん。気をつけてよ。僕も後ろから援護するよ。」

「頼むぞ。」

今日は夜の戦闘なので、昨日より辛いかもしれない。

ウあっ、あ、アアっ、ウっうア

気味の悪いうめき声だ。もうすぐそこまで来ている。

「さあ、鬼でも蛇でも何でもでやがれ!」

突如、風向きが変わったと思ったら、生臭い生ゴミのようなにおいがしてきた。

「何だ、このにおい!？」

「まさか、強力なDark Matterってのは…」

そして、その正体はすぐにわかった。緑色や白、赤などの様々な色の奴がいる。地面を這ってくる奴もいる

「やっぱり。今回のDark Matterはゾンビ軍団ってところか。そういえば、裕一郎がこんなゲームやっているって聞いたな。面倒なゲームじゃが…それにしても、多すぎねえか?ざっと100体以上はいるぞ…」

ウガアグがうぐアああアッ!

「ちっ、かかってこいよ。てめえら、行くぞ!」

「おっ!…!」

戦闘開始

動きは遅いが、数で攻めてくるみたいだ。

「みんな遠距離戦で戦い続ける。接近されたら囲まれてしまうぞ！」

「ああ。」

俺たちは、敵の撃墜を始めた。DSR-1を放ったら一撃でゾンビたちは倒れていく。貫通して、後ろの奴にもあたっているようだ。怜治たちも続々と倒していく。

「なんだか弱っちいなあ…本当にこいつらが強力なDark Matterなのか？つてうわっ!？」

地面を這ってゾンビたちが進んでくる。ミイラ男のようだ。通常のゾンビより動きが速く鋭い爪を持っている。攻撃してもなかなか止まらない。みんな後退しながら反撃する。

「ちっ、普通の奴らより強いな。政宗、引火ガスグレネードを奴らの中に投げてくれ。」

「どうする気なの？」

「RPGで引火させて、一撃で殲滅する。」

「了解。」

ちょうど風は、俺たちから奴らの方に吹いている。政宗は、引火ガスグレネードのピンを抜いて奴らの中に投げ込んだ。

「ガスが充満するまで、しばらく攻撃中止だ。」

「了解。」

しばらく待つてからRPGの準備をして、奴らに向かって発射した。

「全員、後ろへ逃げろっ!！」

ドガアアアアアアン!!!

ものすごい爆風と熱線で、前にいたゾンビたちは消滅した。しかし、

「まだまだたくさんいるみたいだな。」

「一体どんだけの数いるんだよ?」

「龍平、俺たちもAK47にチェンジして応戦しよう。DSR-1で少しずつ倒してもきりがねえ。」

「だな。」

俺たちは、AK47にチェンジして、リロードをした。その時、後ろ側の異変に気づいた。

「おい、後ろ側からも来てるぞ。」

「まずいな。ここ一本道だぞ。逃げ場がねえじゃねえか。」

いつの間にか、一本道に追い込められていたようだ。

「政宗、もう一発引火ガスグレネードでぶっ飛ばせないか？」

「龍平。俺も考えたけど、風向きの問題で俺たちにも被害がでてしまう。」

「くそつ。後ろ側の方がゾンビの数が少ないみたいだから、そっちの方に突破口を作ればいいけど。」

その時、後ろの方で物を切るような音が聞こえた。

「何の音だ？」

前のゾンビを反撃しながら、後ろの方を見てみると後ろのゾンビは全滅していた。そこに二人、白いスーツ姿の人が立っていた。

「その6人とも、早くこっちへ！！」

「あ、ああ。」

みんな動揺しているようだ。俺たちは、言われる通りに一旦退却した。

旗竿地の中に逃げ込んで、一息ついた。

「ところで、あんたらは一体なんなんだ？」

「俺は、LPSのクラン『ENT』の大和だ。」

「同じく、『ENT』の翔だ。」

「お前ら、さっきの奴らか！？」

「さっきというと？ああ、個人戦で戦った方々ですか。」

「そうだよ。俺は、クラン『Efforts』の藤堂秀樹だ。って、思い出した。お前3組の藤木と松本だろ！？剣道で県トップの。」

「おい、トップは大和だけや。俺はちがうぞ。」

「すまんすまん。そういうえば、援軍のクランってお前たちの事か？」
「はい。Dark Matter 戦はかなりの回数やっています、
こんなにたくさん発生するのは初めてですね。そして、Real
World Entranceはおそらく彼の家でしょう。」

大和は、裕一郎を指差しながらしゃべる。

「そうなの？ Real World Entrance って、現実
世界への入り口でしょうか？ あいつらは、僕のイメージなの？」

「多分な。お前ゾンビがたくさんでるゲームしてただろ。」

「秀樹くん、ゾンビパレードの事？」

「それぞれ。多分そのゲームのイメージがこの夢になっているんだ。」

「ゲームねえ…この夢もゲームみたいな物だな。」

「どういう事だ、怜治？」

「DMが俺たちを操作して、Dark Matter と戦わせる攻
防シミュレーションゲーム。これは自分たちの意志ではなく、DMの
意思で動かされている。まさに俺たちにとってはただの悪夢だね。」

「悪夢のゲーム…さしずめナイトメアゲームって事か。」

「その考えは間違っていないと思います。」

大和が話に入ってくる。空気が淀んでくる。

「どういう事だ？」

「僕たちも、そんな気がしてるんです。僕らが他の人の夢に入っ
ているのではなく、DMが、僕らの夢の入っているような気がして
るんです。気のせいかもしれませんが…」

「まあ、そのうちわかるやろ。」

その時、俺の後ろに、ゾンビが現れた。

「危ないっ！」

大和が、腰に掛けていた太刀を抜いて、ゾンビに斬りつけた。
ゾンビは真っ二つになって倒れた。恐ろしいほどの早技だ。

「ふう、危なかったですね。」

よく見てみると2m以上はありそうな大きな太刀だ。

「ぐずぐずしていたらReal World Entranceを突破されてしまいます。こうなったら、裕一郎君の家の前で守りきるしかないですね。君の家はどこですか？」

「ここから南に1kmぐらいのところだよ。」

「よし、道案内してくれ。」

「わかった。」

俺たちは、裕一郎の家まで走った。すごい速度で進んでいく。風が吹き付けてくる。そして、裕一郎の家に着いた時にはまだ1分ぐらしかたっていない。時速60kmぐらいはでいただろう。ゾンビ軍団はまだ来ていないようだ。そして、裕一郎の家を見たとき、俺たちは裕一郎の家の異変に気づいた。

「なんだか空間がゆがんでいないか？」

裕一郎の家がぐにやぐにや曲がっているように見える。

「これが、Real World Entranceです。僕らもひさしぶりに見ました。」

「お前らは初めてじゃないのか？」

「前とても大きなDark Matterが出現したときこの入り口の前でギリギリで倒しました。」

そんな強力な奴もいるらしい。俺は身震いがしてきた。その時、ゾンビたちがやってきた。

「主役のお出ました。てめえら、行くぞ!!！」

「おう!!！」

戦闘開始

「僕たちが前で奴らを倒すから、君たちは後ろから援護してくれ。」

「俺たちに指図すんな。ま、少なくとも協力はしてやる。」

しかし、そう言っていた俺たちは「ENT」の2人の圧倒的な実力に言葉を無くしてしまった。

「うおおりやああああ!!」

大和はゾンビたちに接近して、一気に薙ぎ払う。2 m超の大きな太刀がゾンビたち駆逐していく。翔も負けずに二つの刀ですごい勢いでゾンビを粉碎する。この刀も1.5 m近くある大きな刀だ。その時、大和の体を、弾丸が襲う。

「グハツ!?!」

ゾンビの中に、拳銃やアサルトライフルを持った奴らが現れた。

「おいおい、なんでそんな物もってんだ!?!」

「みんな気をつける!!」

しかし、奴らは問答無用で打ち続ける。俺たちもつかつに攻撃をできなくなってしまう。そんな中、大和と翔は弾丸を刀で撃ち落とす突っ込んでゆく。

「そんな事が本当にできるのかよ…!」

俺たちは、感嘆の声を漏らした。

「はあああああ!!」

大和は、体に力を溜めながら体を回転させ奴らに切り掛かる。

翔は、舞のような動きでゾンビに攻撃を浴びせる。

「赤刃嵐!!」

二人の刀が赤く発光してゾンビたちを上空へ巻き上げる。

「これでもくらえ!!」

俺たちは、空中のゾンビを撃ち落とすとしていく。

「ナイスアシスト!!」

「ははっ、どんなもんだい!!」

その時、俺たちの横で大爆発が起きた。

「なんだ!?!」

「ロケットランチャーです!!! 5体ほどのゾンビが持っています。」

「いくらなんでもそれは無しだろ…!」

しかも、他のゾンビの数も増えていく一方だ。

「畜生、一体どうすれば…!」

そのとき、ある事に気づいた。

「そういえば、政宗、引火ガスグレネードは使えるか？」

「そうだなあ…ちよつと風向きがまずいかもしれないけど、多分いけるよ。」

「多少の被害は気にしねえ。頼むぞ！」

「わかった。」

政宗は、引火ガスグレネードのピンを抜いて奴らの中に投げ込んだ。ガスが広がっていく。

「2人とも、早くこつちへ！！」

「わかつてるよ！」

「これでも食らえっ！！」

RPGを発射。ガスに引火して大爆発を起こす。俺たちは、裕一郎の家の庭に逃げ込む。

ドガアアアアアアン！！！！

「おおあああつつつつ！！！！？」

壁を吹き飛ばすほどの威力で、ゾンビたちは全滅した。

「これで終わりか…？」

俺は、ゾンビが全滅したのを確認してやっと安心できると思った瞬間。

ウガアアアアアアアアア！！！！

大音量の咆哮が響き渡ってくる。俺たちは、外の様子を確認する。

「まだくるのか？」

「あそこに立っている奴だろう、かなりでかいな…」

そこには、二階建ての家より大きなゾンビが立っていた。大きな棍棒を持っている。

「多分ボスの存在だろう。こいつを倒せばゲームクリアかな…ゾンビとの最終決戦だ、てめえら、行くぞ！！！」

「おう!!」

戦闘開始

巨大ゾンビは、棍棒を振り上げて俺たちに殴りつけてくる。

「避けるっ!!」

俺たちは左右に逃げる。しかし、

ズガアアアアンソーン!!

道路にひびが入り、地面が揺れる。ものすごい風圧で吹き飛ばされそうになる。

「なんちゆう威力だ!? あんなの食らったら無事じゃすまねえぞ!

」

「だけど、動きはとろい。しっかり動きを見てれば大丈夫だ。多分な...」

巨大ゾンビは体勢を立て直して、力を溜めているようだ。

「何をやる気だ?」

そのとき、巨大ゾンビは棍棒を横から薙ぎ払ってきた。

「全員跳べえっ!」

俺たちは、上空へ跳んだが風圧で吹き飛ばされてしまう。

「おわああああ!?!」

ダンッ!

全員地面に叩き付けられた。かなりの高さから落とされた分、ダメージも大きい。

「痛ててて...」

「そろそろ反撃するか。みんないくぞ!」

「言わなくてもするよ!」

大和と翔は、ゾンビに向かって突っ込んでいく。そこへ、ゾンビが棍棒を叩き付ける。

「しゃらくせえっ!!！」

二人は、棍棒を刀で受け止める。ものすごい衝撃波がこっちへ来る。「てめえら、なんか援護できねえのか!？」

「うつせえなあ、やってやるよ。」

龍平は、RPGを片手に、奴の頭へ跳ぶ。

「零距离RPGを食らえっ!!！」

RPGで頭部を破壊するが、まだ、奴は動いている。龍平は、爆風で空中を飛んでいる。

「ちっ、おめえらこの腕をなんとかしろ!!！」

翔たちはもう限界のようだ。

「たくっ、無茶な事しやがって。」

龍平は、空中でRPGに砲弾をセットすると、腕に向かって発射する。砲弾は、巨大ゾンビの手首に直撃し巨大ゾンビは棍棒から手を離す。その際に、大和と翔は棍棒をはじき跳ばして脱出する。

「ものすごい力ですね。翔、あの技で決めましょう。」

「わかった。でも、あれものすごい疲れるからやりたくないんだよな…。」

「言い訳はいいから、いきますよ。」

大和は、刀を右手の中指と薬指の間に持って構えた。

翔は、刀を鞘にしまい、脱力し始めた。

「おいおい、何を始めようってんだ？」

「しばらく時間がかかるので足止めしておいてください。」

「ちっ、わかったよ。ただし、自分勝手もほどにしときな。」

と言ったものの、腕と頭を破壊された巨大ゾンビはこっちを見て殴り掛かってくる。

「あんなやつどうやって止めるんだよ…。」

俺は、巨大ゾンビの攻撃を避けると、そのままRPGを足に向けて発射した。巨大ゾンビは転倒。巨大ゾンビが立ち上がるうたとすると、

大和の声が聞こえてきた。

「皆さん、僕たちの後ろへ逃げてくださいっ！」

「何をやる気だ？」

「いいから早く！」

翔が刀に手をかけた瞬間、翔の体が赤く発光し、ゾンビに向かって跳んだ。

「二刀流居合、鬼刃撃っ！！！」

その瞬間翔は消えて、翔は巨大ゾンビの後ろ側に立っていた。そのまま刀をこっちに投げてきた。

「後は任せるぞ大和！」

「OK！さあ、カーテンコールだっ！」

大和は、投げられた刀を空中でキャッチすると右手に爪の様の持った。大和の体が、紫色に発光する。

「飛竜爪、紫電っ！！！」

巨大ゾンビの頭から地面まで3つの刀で切り下ろしたが、巨大ゾンビには何ともないようだ。

「翔、刀返すよ。」

翔に2本の刀を投げて返す。

「チエックメイト！」

そういつて、刀を鞘へ戻すと、巨大ゾンビは血を吹き上げて崩れ落ちた。

「すげえ……」

「ああもう、この技超つかれるからいやなんだよなあ……」

「だからやりたくないって言っただろ。自分で文句言ってどうするんや……」

「わかってますよ。ところで皆さん大丈夫でしたか？」

「あんたらがすごすぎて被害はねえよ。」

「それはよかった。それにしても、あなた方の技術もすごいですね。」

「え、俺たち何かやったっけ？」

「僕たちが赤刃嵐で打ち上げたゾンビたちを1体も残らず撃ち落とすなんてすばらしいです。」

「あんたに言われるとうれしいよ。」

そして、突然の頭痛。

「皆さんおつかれさまでした。」

「ようDM。ところで、この頭痛ってなんで起きるんだ？」

「ああ、それは私があなた方の脳の中に入る時、私は異物と判断されるので頭痛が起きます。すぐに治る理由は、私にもわかりません。」

「!?!?…そ、そうなのか。」

怜治は何か気になる事があるようだ。

「では、また今度。」

「あ、おいちよつと待て。」

頭痛がして、DMの声は聞こえなくなった。

「またすぐ行きやがった…ところで怜治、何か気になる事でもあるのか？」

「あ、いや何でもなし。じゃあまた明日。」

「おい、ちよつと待ってくれ。話があるんだ。」

「なんだ？」

みんな俺の方を見る。

「3人とも俺たちのクランに入らないか？」

「は？」

3人とも素っ頓狂な声を上げた。

「ふむ、僕は賛成だよ。翔はどうだい？」

「俺!?俺は…まあ、いいかな…」

「僕もいいよ。」

「よし、じゃあ明日から新生『Efforts』の始動だ!!!」

「おっつ!!!」

8人は拳を突き上げて、声を上げた。

そのとき、体が薄くなっていくのに気づいた。

「ああもう、このパターンいやなんだよ！」

「みんなまた明日なあっ！」

「ああ。」

「…これは夢の中？今日はもうDark Matterを倒したぞ？」

周りには何も無い、真っ白な世界だ。その時、俺の前に女神が現れる。きれいな顔だ。

「汝、何を欲す？」

「え？」

「創造主との戦争、その幕開けに、汝は何を望む？」

（創造主！？もしかしてDMの事か？それに引き裂かれる運命って？）

女神はつぶやく。

「この混沌の渦の中、創造主の陰謀はもう始まっているというのに、汝は何も持たずに戦うのか？」

「おれは…おれたちは、強さが欲しい。平和を守るためおれたちは戦う。」

「そうか、強さか、それは、明日わかるであろう。」

「待て、お前は何者だ！？」

「我は、造物主に仕えし者。造物主の陰謀に飲み込まれし者に手を差し伸べる者。名はフィーニスという。」

「造物主の陰謀に手を差し伸べし者…陰謀に飲み込まれし者って、俺たちの事か？」

フィーニスは静かにうなずいた。

「それはどういう事だ？」

「そのうちわかる。」

「なんだかめんどくさい事になったな…」

「ああ。」

先生からの指示は、

「皆さん、状況はわかっていますね。全員帰宅して自宅待機です。」との事で、現在帰宅中である。

「あれ、今度から Real World Entrance の前で使うの禁止な…」

「だな。またこんな事になるとめんどくせえ。」

「じゃあまた明日。」

「また、後でだろ。」

「多分な。」

予想通り、俺たちはまたナイトメアゲームをする事になった。しかし、今度は学校の前ではない。どうやら発電所のようなのだ。

「ここは、火力発電所？もしかして、いとこの剛兄ちゃんの働いているところか！？つまり、今回の Dark Matter は兄ちゃんのイメージか。」

「何を一人でぶつぶつ言っているんだよ…」

「ああ、みんな、ごめんごめん。そういえば、新生 Efforts の初戦だな。」

「ああ、みんないくぞ。」

「おお。」

気合いを入れたところで、突然の頭痛。

「みなさんそろいましたね。どうやら、今回の Dark Matter は、秀樹君のいとこさんのイメージのようですね。」

「馴れ馴れしく呼ぶな。兄ちゃんは、泊まり込みで働いているからあの発電所が Real World Entrance みたいだな。」

「そうですか。では、健闘を祈ります。」

「ちょっと待て、話があるんだ。」

「それは、戦闘が終わってからにしましょう。」

頭痛がして、DMの音が聞こえなくなった。

「戦闘の後か…よし、早く終わらせて話をしよう。てめえらいくぞ
!!!」

「おう!!」

とは言ったものの、どこにDark Matterがいるのか見当もつかない。

「どうする秀樹、手分けして探すか？」

「うーん…そうだな、この近辺にいる事は確かだからなにか見つけたら信号弾を撃つてくれ。」

「わかった。」

みんな分かれて手分けして探す事になった。しばらくして、信号弾が発射されたのでそちらの方へ行ってみると何かを通った後があった。

「これはなんだ？」

「粘液か何かかな？なんだかアルコールのようなにおいがするけど…」

そういえば、鼻を突く強烈なおいがしてくる。

「この後を追えばDark Matterがいるかもな。」

俺たちは、何かの液体の後を追っていくと、道の真ん中に何かが立っているのに気づいた。

「あれは、カタツムリか？」

そこには、緑色のカタツムリがいた。

「だな。まためんどくさそうな敵だな…よし、てめえら行くぞ！」

「おう!!」

戦闘開始

「明日は期末テストなので、さっさと片付けてしましましょう。」

「あ、そうだった、勉強してねえ…」

「ほら、早く倒して早起きしましょう。」

大和は、Dark Matter に接近して、カタツムリの殻に逆袈裟斬りで斬りつける。刀には炎が走る。

翔は、二刀流居合 鬼刃撃の構えに入っている。

「炎獄、紅龍!!」

逆袈裟斬りを殻に当て、袈裟斬り、横切りへと派生させていく。

「おりゃあああ!!」

最後の横切りを当てた時、カタツムリから炎が上がり、翔は二刀流居合 鬼刃撃をカタツムリに食らわせる。衝撃波で、炎は消し飛んだ。しかし、殻には、傷1つついていなかった。

「炎獄 紅龍が利いてない!？」

「俺の鬼刃撃まで跳ね返しやがった…！どんだけ硬んだよ!？」

こんなに硬くては、俺たちの銃も効果はない。

「世界にはダイヤモンドより硬い物質もあると聞きますが、ここまです硬いとはびっくりですね。こうなったら本体を狙うしかないですね。」

大和は、カタツムリに向かって走っていく。俺もカタツムリの本体に弾丸を撃ち込む。しかし、直撃したが当たった音がせず、粉塵がまっただけだった。弾丸は、カタツムリの体にくっついていて。そして、地面に転げ落ちた。

「そんな馬鹿な…！衝撃を完全に吸収されたのか!？」

大和はカタツムリの本体に刀を振り下ろす。

「はっ!」

しかし、刀が本体に触れた瞬間、刀は止まってしまふ。大和は一旦引いた。

「斬撃も利かなくなると、かなり厄介ですね…」

「だが、攻撃はしてこない。殻への攻撃は衝撃が内部にまで伝わっ

ているはずだから、そこを狙えば倒す事ができるかもしれない。」
そう思った瞬間、カタツムリは、本体を殻の中に入れると体を発火
させものすごいスピードでこちらへ転がってきた。

「おわわわっ!?!」

カタツムリは、巨大な大木に直撃し、大木は薙ぎ倒された。大木は
燃え上がる。カタツムリはまたこちらは転がってくる。

「どういう原理で動いてんだ!?!」

カタツムリの突進を避けると、こっちを向いてカタツムリは動か
なくなった。本体を殻から出して、こちらの様子をうかがっているよ
うだ。

「とりあえずみんな一旦引け!!あまりに分が悪すぎる。」

「あいつはどうするんだよ?」

「粘液の後を追えばいい。それで何とかなる。」

「わかった。」

俺たちは、一旦近くの林のところへ身を隠した。

「ふう、危なかったなあ。」

「あんなのが相手だったら勝ち目ないよ…」

「何か突破口はあるはずだ。奴の特徴から弱点を考えてみよう。」

さすが怜治、こんな時でも冷静だ。

「そういや、あいつに攻撃した時のわかったんやが、あいつ自分で
炎消してたで。」

翔は不思議そうな顔で言った。

「どういう事だ?あれは、お前の攻撃の衝撃で消えたんじゃないの
か?」

「いや、当てる瞬間炎が内側から消えていくのが見えたわ。自分で
消火できる能力があるんじゃないか?」

「そうだな…あいつの転がるための推進力の事も気になるし、緑色
の殻にも何かあるんじゃないのか?」

「秀樹、粘液の事もありますよ。これがサンプルです。」

大和は、瓶に入ったカタツムリの粘液を俺たちに見せた。

「それ採っておいたのか、すげえな。」

「これは多分エタノールですね。なんでこんなものが体内からでてくるのかわかりませんが…」

その時、俺たちの後ろで物音が聞こえた。

「みんなしゃがめ!!」

後ろにはぶどう園があった。そこに動く緑色の物体がいた。

「あれは、さっきのDark Matterだな。何をしているんだ？」

一瞬、何かわからなかった。緑色の殻を使って、他の植物に擬態していたのだ。

そのとき、Dark Matterは本体をものすごい大きさにして、ぶどう園に覆い被さるようにして、ブドウを食い尽くした。ぱりぱり木ごとと噛み砕き、別の所へ行ってしまった。

「ぶどうが主食？目的はなんなんだ？」

「さあな、甘い物好きなんじゃね？」

「甘いもの、ブドウ糖が目的なのか？…体から出るエタノール、爆発的な推進力に、消火能力…」

怜治は座り込んで考察を始めた。

「にしても、あの歯がすごいよな、木まで噛み砕くなんて。」

「っ！、今なんて言った!？」

龍平たちのおしゃべりに怜治が割り込んでいく。

「いや、すごい歯だなんて…」

「そうか、アルコール発酵だ！大量のブドウ糖を二酸化炭素とエタノールに変えて、体外の放出させていたんだ！これで、すべての行動の原理がわかった！」

「何その…アルコール発酵だっけ？」

「ブドウ糖などの糖分をエタノールと二酸化炭素に分解して、エネルギーを得る方法さ。呼吸みたいなものだよ。」

「そうか、あいつの本体は粘着性が半端ないからエタノールを出して、体を滑らしていたんだ。」

「そう、そしてエタノールを歯を火打石のように使って発火させてあれだけの推進力と炎を生み出していたのさ。二酸化炭素は、殻が燃えているときに放出して消火するのに使用していた。」

「すごい知識量だ。俺もここまでの事は知らなかった。」

「だけど、どうすればあいつを倒す事ができるんだ？」

「一点にもすごい力をかけて、あいつを貫くしか方法はないな…」「どうすればそんな事ができるんだ…」

その時、俺たちの目の前は光に包まれ真っ白になった。そこへフィニアスが現れた。

「お困りのようですね。」

「お前：強さってなんだ？俺たちにくれる強さとはなんだ？」

「それは、あなた方の持つている武器の力の解放です。」

「武器力の解放は、俺たちはもうできるぞ？それ以上の力を持てるのか？」

翔はフィニアスに問いかける。

「大和と翔が行っているのはただ武器の力を100%まで引き上げる事。これは、本人の意思で発動させる事ができます。負担も少しです。武器力の解放とは、武器の持つている特性や能力を120%、150%以上にまで爆発的に押し上げる技の事を指します。しかし、使用者にはものすごい負担がかかります。」

「それは、どうすればできるんだ？」

一番の疑問をフィニアスに問いかける。みんな真剣な眼差しだ。

「集中しなさい。そして、願い、強く信じなさい。自分の力を。」

そして、周りは元の林へと戻っていった。

「自分の力を信じる…か。よし。休憩はできたな。てめえら、いくぞ！」

「おっ！…！」

「なあ大和、お前たちの武器って一体なんなんだ？」

「ん、これか、これは、龍刀 紅炎っていう刀だ。特殊な鉱石により、炎を生み出す事ができる。ま、実在しないがな。」

「翔の刀は？」

「あいつのは龍刀 蒼雷っていう刀だ。この龍刀 紅炎と対になる刀だ。特殊な鉱石で直流の電気を生み出す。それを利用した技があるんだが、電力不足で未完成だな。」

その時、目の前から、火炎車が転がってきた。

「Dark Matterだ！気を引き締めていくぞ！」

「おう！」

戦闘開始

「武器力の解放か。もしできれば、あの技も完成だ。やってみる価値はあるな。大和！足止めよろしく！！」

「了解！」

大和は、Dark Matterに向かって走る。

翔は、刀を二本もって集中。右手には、スナイパーライフルの弾丸を持っていてる。

俺たちも、集中し、願い、自分の力を信じる。そのとき、銃が変形、拡張した。拡張した部分には青い光がほとばしり、ものすごい風がまきおこる。

「おらあああ！」

弾丸を発射、Dark Matterを吹き飛ばし、地面に叩き付ける。大和の刀も赤い光がほとばしり、Dark Matterの本体に向かって一閃する。鮮血が吹き上げ、Dark Matterは本体を殻の中へ隠す。炎を発生させ、完全に守りの体勢に入った。

「てめえら、どけえええ！！！！」

その時、翔のいる方からものすごい声が出た。龍刀 蒼雷の武器力解放。俺たちより、桁違いにすごいエネルギーだ。刀の長さは5m 近くにもなり電気がほとばしる。翔は、刀を二つ重ね、その間に弾丸を装填する。

「細けえ原理は気にしねえ。新技、超雷刃砲！くらえっ！」

その瞬間、Dark Matterの殻に亜光速にまで加速された弾丸が直撃し、殻にひびが入った。まだ弾丸は回転して殻にめり込んでいる。

「とどめは俺だああ！！！」

大和はDark Matterに突っ込んでいく。龍刀 紅炎の武器力解放。刀から炎が立ち上り、Dark Matterの殻を突く。

「封滅突 龍火！！！」

龍刀 紅炎がDark Matterの殻を貫く。殻は砕け散り、Dark Matterの本体が現れる。Dark Matterは本体をとつともなく大きくして、俺たちに覆い被さってきた。

「龍平たち、迎撃するぞ！！！」

「おう！！！」

俺たちは、Dark Matterに弾丸を浴びせかける。弾丸はDark Matterの本体にくっついて全弾止められてしまった。Dark Matterは体を収縮させ全ての弾丸を吸収してしまった。その時、Dark Matterの体に金属のような殻が現れた。

「ちっ、弾丸を吸収して自分の殻にしたか。なんならこれも食べない！好き嫌いはダメだぜ。」

龍平は、ポケットから拳大のものを出し、Dark Matterに向かって投げつけた。Dark Matterは投擲物に向かって体を伸ばして体内に取り込んでしまった。

「蜂の巣になりやがれ！！！」

龍平は何かのスイッチを押す。その瞬間Dark Matterの

体内で何かが爆発して、爆音とともにDark Matterは崩れ落ちた。

「…クレイモア地雷か、龍平、使い方間違っているぞ。」

「へへへ…まあいいじゃん、勝てたんだし。」

「まあな、みんなお疲れさん。」

そういった時、俺たちは地面に崩れ落ちるように倒れた。戦いの中で緊張しきっていた俺たちに、緊張の糸が切れた瞬間いきなり疲れが襲ってきたのだ。

「あれ…体がうまく動かせねえや…」

みんな地面に転がってしまった。体中が痛くて、もう一生分ぐらい疲れてしまったような気がする。これが、武器力解放の代償のようだ。

「そろそろDMがくるころだな。」

「ああ、奴には聞きたい事がたくさんある。また逃げられてたまるか。」

その時、俺たちの目の前に一本の光が落ちてきた。爆音とともに、粉塵が舞い地面が揺れた。

「なんだ!?!」

全員飛び起きるが、全身に力が入らないので地面に手をつきながらなんとか立ち上がった。光の方を見る。粉塵の中に一つのかげがあった。

「!?!?」

その時、謎の影は政宗の胸を貫き、俺たちの目の前に現れた。

政宗は壁の方へ吹き飛ばされ、そのまま力尽きたように倒れ込んだ。そして、次第に体が薄くなって消えてしまった。

「政宗!!、ちくしょう…きさまああ!!」

再度、DSR-1の武器力解放。他のみんなも武器力解放していく。「吹き飛ば!!」

謎の影に弾丸を撃ち込むが、高速移動で避けられてしまう。全弾撃ち尽くし、銃撃が途絶えてしまつてから、謎の影は止まった。2m近くありそうな巨体だ。悪魔のような格好をしている。その時、謎の影は俺たちにはしゃべりかけてきた。

「なぜ、我々の邪魔をする？」

「邪魔？俺たちが何かしたのか？」

怜治が問いかける。そのとき、謎の影は怜治に槍を突きだしてきた。2m以上はありそうな長くて太い槍だ。それを2本持っている。その瞬間、槍から巨大な光の束が現れて、怜治の体を焼き尽した。

「ふざけるな！！我々の同胞をきさまらがことごとく倒しているではないか！！我々の計画の邪魔をするな！！」

すごい気迫は伝わってくる。

「怜治っ！そのためえ怜治に何をした！？同胞！？そんなもの知るか！」

修平は反論する。しかし、修平も槍からでる光の束に飲み込まれて焼き尽されてしまった。

「待て、落ち着け！お前は何を望む？」

「我々の同胞をこれ以上倒すな。今までに3人。我々の同胞にこれ以上手を出すな！」

「同胞とは、Dark Matterの事ですか？」

大和はほとんど見抜いたような感じで問いかける。謎の影は驚いた顔をして、少し戸惑っている。

「！？きさま、気づいているようだ。ならば、ここで葬ってやる。」

謎の影は、…高く跳び、二本の槍を重ね、俺たちに向けてきた。

「ファイナルジャッジメント！」

その瞬間、目の前が真っ黒になったかと思つたら、俺の意識は遠のいていった。

真面目にアホな戦いをしろ！！

「うわああああ！！」

謎の影によつて、現実世界を戻されてしまったようだ。

「なんだったんだあいつは…それにしてもあの大和の言葉、あれが本当ならばあの影は、Dark Matterのボスってことなのか？」

考えをめぐらしていたら、体の異変に気づいた。ひどく体が重い。

「夢の中だったのに疲れが残っているのか！？そこまで激しい疲労だったのか…」

今日は土曜日だ。特に用事もないので、今日は家でゆっくりする事にしよう。

「秀樹、いつまで寝ているの！！ごはんよ。」

「ああ母さん、今行くよ。」

時計を見てみると、もうすぐ12時になるうとしていた。

「もう昼か…そんなに長い間ねていたのか…」

しかし、もう昼だというのに全く食欲がわいてこない。ちょっとおらずに手をつけたぐらいで自分の部屋に戻って寝こんでしまった。

結局、今日はほとんど何も口にせずに夜になってしまった。朝からの疲れがまだ残っているがだいぶましになってきた。しばらくゲーミング雑誌を読んでいたが、やはり何もする気になれずそのまま寝てしまった。

そして、夢の中へ

「ここは、俺の家？」

自分の家の前に立っている。朝か昼かわからないくらいの大豪雨で雷が鳴っている。そして、自分の家がゆがんで見えた。

「俺の家が、Real World Entrance…俺のイメージという事か。」
みんなも近くに居る。放していると、政宗たちも俺と同じように現実世界では無事だったようだ。
そのとき、南の方からものすごい衝撃波が襲いかかってきて、周りの建物とともに俺たちを吹き飛ばしていった。

「痛ててて…今のはなんだったんだ？」

周りを見渡すと、みんなの姿はなく、ただただがれきが続いていた。みんなを捜そうにも、雨がひどくて視界が悪い。

「そうだ、信号弾があった。」

空に向かって信号弾を撃つが、翔と裕一郎の姿はなかった。

「だいぶ遠くまで跳ばされたんだろう、また後から追いつくよ。」
そうだといいが、根拠は全くなかった。

そのとき、遠くの方でもものすごい音がして地震があったかのような振動が伝わってきた。

「今の音がした方にDark Matterがいるのかもな。よし、行ってみよう。」

音のする方へ行ってみると、とてつもなく大きな龍がいた。2つの大きな翼を持ち、太い後ろ足で体を支えている。全長25m近くある龍だ。体は白銀に輝き、二つの目でこちらを睨んでくる。

「これは…さっきのゲーム雑誌に載っていたゲリユレイス…最悪の敵だな。おそらく今までのDark Matterとは比べ物にならないくらい強い。だからって、ここで退く事はできない。みんないくぞ!!」

「おう!!」

戦闘開始

ゲリユレイスが体をのけぞらせ、こちらに向かつて、咆哮を食らわせた。地面が割れ、ものすごい衝撃波が襲いかかってくる。

「これはさっきの衝撃波…あんな遠い所から俺たちを察知していたのか!？」

俺たちは、なんとか地面に踏ん張って耐えたが、しばらく動く事のできなくなってしまった。ゲリユレイスは大きな翼を使って飛び上がった。口の周りで炎が上がり、俺たちに向かって火炎弾を撃ち込んできた。直径10m以上はありそうな巨大な火球が襲いかかってくる。

「避けるおおおつ!!」

だれがしゃべっているかわからない。それほどの大豪雨だ。こんな雨の中、火球は近づいてくる。

「くそつ!!」

風と雨に足を取られてしまう。なんとか直撃は避けたがものすごい爆風に吹き飛ばされてしまう。吹き飛ばされて来たがれきが体に直撃する。

「グハツ!？」

意識が朦朧としてくる。他のみんなも同じようにしてうずくまっている。ゲリユレイスは、火炎弾をさらに撃ってくる。体はもう動きそうにない。

「もう終わりか…」

火炎弾が近づいてくる。目の前が真っ赤に染まって炎が周りを焼き焦がす。その時、遠くの方から衝撃波がやってきて、火炎弾もろともゲリユレイスを撃ち落とした。

「今のはなんだ…」

体がやっと持ち上がった。衝撃波がやってきた方を見てみると一人の人影があった。

「みんな大丈夫かあ!？」

翔の声が聞こえてきた。やっと追いついてきたようだ。

「すまねえ、最初の衝撃波のせいだからかなり飛ばされてしまった。と

りあえずあいつはかなりヤベえ。一旦引くぞ。」

「待てよ、全員まともに動けねえぞ。あいつはどうするんだよ。」
怜治はゲリュレイスの方を指差していった。怜治もかなりのダメージを受けているようだ。

「なあに、しばらく動かなくすればいいんだろ？俺に考えがある。」
そういつている間にゲリュレイスは回復しており、上空に向かって雷の玉を打ち出した。

「雷が落ちてくるぞ！かなり広範囲への攻撃だ。みんな逃げろ。」
「よく知ってんなあ。」

「なあに、さつき本で読んだ。こいつは俺のイメージだから、おそらくその攻撃だ。」

上空の雲の中で雷は増幅され、俺たちの所に向かって落ちてくる。何発も何発も。全員遠くへ逃げ出す。一人を除いて。

「なにやっつてんだ翔、死ぬぞ！！」
その瞬間、龍刀 蒼雷の武器力解放。超雷刃砲の構えに入った。その上に、雷が落ちてきた。

「翔、危ねえ！！」
雷が翔に直撃。しかし、翔は無事のようだ。それどころか力がより増している。

「電力吸収完了！食らえ！」
超雷刃砲を発射。雷のおかげでパワーアップした弾丸は、ゲリュレイスの頭部に直撃し、ゲリュレイスは遠くまで吹き飛ばされた。しかし、弾丸は貫通せずにはじかれた。

「今だ、全員逃げろぞ。」
全員ふらつく足取りで、遠くまで逃げた。

ゲリュレイスから逃げて、みんな物陰に身を隠した。かなり消耗しているのだろう。

「みんな大丈夫か？」

なんだか気の抜けた声で翔はしゃべりかけてくる。

「お前が一番重傷のはずじゃないのか！？雷をモ口食らっていたぞ…」

「あれは、電気を吸収できるかもしれないからダメージはないんじゃないかね…と違って食らってみたら、無傷だったよ。そんな保証は全然なかったけど…」

「やっぱり、かなり危険だったようだ。」

「でもさ、ここにいてもまたさっきの咆哮がくるんじゃないか？」

「いや、それは大丈夫。超雷刃砲食らって気絶してたから。」

自信満々に言う翔に向かって大和はなんだか不満そうな顔をした。

「どうした大和？」

「いや、別に…」

なんだか嫌そうな顔をしている。普段まじめそうな大和が珍しく不機嫌だ。

「とりあえず作戦を練ろう。超雷刃砲でもくだけなかったあの甲羅だ。どうやってダメージを与える？秀樹、何か意見はないか？」

「お前の電撃を食らわせればいいじゃないか？甲羅にも通電するんじゃないのか？」

「俺の電撃？龍刀 蒼雷の電撃か？」

「効くかどうかわからないけどやってみる価値はあるんじゃないのか？」

「まあやってみるか？みんなアシストしてくれ？」

「…ああ。」

やはり大和は何かあるようだ。翔はいらだった顔で、大和に何かあるのかを聞き出そうとした。

「なあ大和、何かあるのか…」

その時、遠くの方で爆発音が聞こえてきたと思ったら、俺たちの隠れていたがれきが爆破した。がれきの破片が飛び散ってくる。

「一体何があっただんだ！？」

外の方へ逃げ出すと、ものすごい風が巻き起こっていた。その風の原因はすぐにわかった。遠くの方からゲリユレイスが火炎弾を撃ちながら低空飛行で突進してきた。

「ああもう、最悪のタイミングできやがったな。てめえら行くぞ！」

「お、おうー！」

戦闘開始

ゲリユレイスはかなり近い所まで接近してきている。

「翔、なんとかできるか？」

「ん、うーん、あ、そういう事か！」

翔は、膝を曲げて空高く飛んだ。二本の刀を逆手に持ってそのまま回転しながら落下してくる。

「雷神空！」

二本の刀をゲリユレイスの胴体と翼の間の関節の部分に突き刺す。かなりのスピードで飛んでいるために振り落とされそうになっている。

「ええい、だまらつしゃい！！これでもくらえ！！」

二本の刀が青く発光し、電撃が奔る。ゲリユレイスは体勢を崩して、そのまま地面に崩れ落ちるように滑り落ちた。

「よっしゃあ。まあ、この後どうするかが問題だな。」

翔はゲリユレイスから刀を抜くと、飛び降りて体勢を整えた。

「大和、あの技いってみるか？そうでもしねえと倒せないんじゃない？」

「うん、まあいいんじゃない。でもさあ、溜めんのに時間かかるからあいつをみんな押さえきれねえんじゃないかねえの？」

「ふざけんな、俺たちにできないとでも思ったのか。押さえきつてやるよ。」

「いいねえ秀樹、そういう態度好きだぜ。」

「気持ち悪いなあ。まあいいや、みんないくぞ！二人が力を溜め終

わるまで、あいつを押さえきるぞ！」

「おお！」

二人とも、武器力解放した。

大和は、炎を刀から生み出して、刀の周りに溜め込んでいる。

翔は、大和のように刀から雷を生み出して、刀の周りに溜め込んでいる。

ゲリュレイスは、翼を大きく振って飛び上がった。

「龍平、翼の付け根を狙え！たたき落とすぞ！」

「了解！！くらえ！！」

翼の付け根、さつき翔が雷神空を食らわせた所だ。弾丸が直撃して、ゲリュレイスはまた地面にたたき落とされた。

「大和、翔、まだか！？」

「もうちよつと待ってくれ！」

「くそ、もう多分押さえきれねえぞ…一体どうすれば…」

その時、後ろの方で、ものすごい音とともに、ものすごい光が起きた。ゲリュレイスは視界を奪われて、その場に倒れてもがいている。

「怜治、今のはなんだ！？」

「スタングレネードだ。それより、早くそこからどけ！」

「え？」

後ろの方を見ると、大和と翔の準備ができているようだ。

大和はそのままの位置で刀を振りかぶろうとしている。

翔は、空に飛び上がって、刀をゲリュレイスに向けて狙いを定めている。

まず大和がゲリュレイスの頭部に向かって突きを繰り出す。

「封滅突 龍火！！」

ゲリュレイスの額に向かって突きを繰り出すが、案の定弾かれてしまふ。

「ちっ、予定変更…」

刀をまわして、そのまま顎の方を突き上げた。刀はギリギリ貫通。刀にはひびが入りそうになっている。

「翔、ここに落とせえ!!」

「おうよ!!」

翔はそのまま武器力解放して、刀に電撃を奔らせる。

「超雷刃砲の改造版、超雷粒砲!!」

二本の刀から電撃が発射されて、ゲリユレイスの脳に刀を通って直接電撃を与える。頭にAEDを食らわせたようなものだ。ゲリユレイスはその場に崩れ落ちるようにして倒れた。

「いよつしゃあ!!」

空中で落下しながら翔は叫ぶ。

「地面突くとくこけんなよ!!」

龍平たちから野次が飛ぶ。

「こけるかよつて、痛つてえ!?!」

翔は着地したと思ったたらそのまま膝を折って、地面に倒れ込んだ。

「武器力解放したらから、体に力が入らねえ…ま、すぐ回復するだろう。」

そこに全員座り込んでしまった。やはり疲れているのだろう。

「よくあんな事考えたよな、大和。刀を通して直接脳へ電撃を与えるなんて…」

俺は大和の事を褒めた。いや、褒めたつもりだった。しかし、

「別に。額への攻撃が弾かれたから、予定変更しただけだ。別に、直接電撃を与える事なんか微塵たりとも考えていなかった。」

龍平が話に入ってくる。

「まあまあ、奴を倒す事ができたんだし、一件落着という事でいいでしょ!!」

そのとき、遠くの方から足音が聞こえてきた。

「おーいみんなあ、大丈夫う!?!」

向こうの方から裕一郎が走ってくる。

「裕一郎、もう大丈夫だ。安心しろ!!」

「そう…じゃあまた危険な目にあわしてやるよ！」

「!?!」

その時、裕一郎の体が漆黒の光に包まれた。

裕一郎の体が漆黒の光に包まれた時、俺は嫌な予感がした。

「まさか…みんな伏せろ!!」

その瞬間、漆黒の光の固まりが爆発し、周りのがれきとともに雷雲を吹き飛ばした。その中からこの前の謎の影が現れた。

「やはりきさまが、DM。ゲリユレイスはきさまの仲間だろ？」

「クツクツク、あなたも気がつきましたか。秀樹。そうです。私こそがDM、Dark Matterの造物主です。」

「裕一郎に化けて現実世界に潜り込んできたのですか。僕たちを暗殺するために…」

「まさか…こいつがDMなのか!?!」

俺と大和以外のみんなも気づいたらしい。

「ドリームマスター、通称DM。ゲーム『ドリームクライシス』にでてくるラスボス。様々なものに化ける事ができる。Dark Matterを味方に付け、主人公たちに襲いかかる。ゲリユレイスはイメージから生まれた幻の龍。」

俺は、さっき読んでいたゲーム雑誌の記事を復唱する。つまり、これは、ゲームの夢を見ている感覚だ。たぶん…

「秀樹。ならばこの後どうなるかわかるよな。」

「ああ、お前を倒して世界を救えばゲームクリア。逆にお前に倒されて俺たちが全滅すればゲームオーバー。」

「まあ、普通のRPGの展開だな。まあ、まともに戦っても勝てないかもしれないな。私の不安要素はきさまらだ。そのために、わざわざ現実世界に行ってまできさまらを殺そうとした。ま、実際は殺す事はできなかったがな。」

「そこまで言っておいておれたちを倒せるかな？」

全員が目が本気になっている。俺たちは、もう負ける気がしない。

「ふん、大口は今のうちにたたいておけ！一撃で葬ってやる。きさまらはゲームオーバーだ。そして、私は現実世界を自分のものにする。」

そう言っつて、手に持った二本の槍を俺たちに向けた。

「デスランサー！！」

その瞬間、俺たちが持っている武器に向かって、槍から光の束を撃つてきた。DSR-1、Hamper、G8は砕けちる。大和と翔の刀は光の束を跳ね返して無事だった。

「なっ！？きさま…卑怯だぞ！！」

「黙れ、戦闘に卑怯もくそもないわ！！これでとどめだ！！」

DMは空に飛び上がり、二本の槍を重ねて、俺たちに向けてきた。

「ちっ、またあの技か！？」

「ファイナルジャッジメント！！」

目の前が真っ暗になった。

「くそおお！！」

俺は全身に力を込めて拳を上に向かって突き上げ、空を殴った。勝てなかつたくやしき、憎しみを込めて。

巨大な光の固まりが近づいてくる。もう終わりだ。

そう思った瞬間、自分の周りが光に包まれて拳の周りに衝撃波が巻き起こった。体温が異常に上昇している感覚がある。ファイナルジャッジメントと拳からの衝撃波とぶつかり合ってお互いに打ち消し合っている。しかし、少しばかりこちらが押されている感じがする。

「んおりゃあああ！！」

突き出していた右手を一旦引いて、そのまま左手を突き上げた。そして、DMもろともファイナルジャッジメントを完全に吹き飛ばした。DMはかなり遠くまで飛んでいった。みんなも気絶していたが、

今の衝撃でやっとな気がついたようだ。

「一体何が起きていたんだ！？秀樹、何が起きたんだ？」

「わからない…ただし、俺が、この手であいつを吹き飛ばしたのは確かだ。一体この力はなんなんだ！？」

そのとき、目の前にフィーンスが現れた。手には、一本の杖を持っている。

「それが武器力解放の真骨頂です。人間が持っている武器、肉体。その肉体の力を限界以上にまで引き上げる事こそが、武器力解放の真意なのです。」

「お前、フィーンスか。なんでこんな所にいるんだ？」

「あなた方、そして私の最終決戦に来ました。」

「最終決戦？何の事だ？」

「本当は、私はDMに使いし者ではない。私は、DMが生み出した Dark Matterだ。しかし、何の手違いか、私にはDMの敵という思考が身に付いてしまった。そこで、私はDMに化けてあなたたちに協力を求めた。DMの送り出す Dark Matter をあなた方に倒してもらい、私はこの戦いの準備を進めた。しかし、さすがにDMは気づいたようだ。DMはあなた方という邪魔者を倒すために、自らこの地に現れたのだ。」

「そういう事だったのか…にしても、何か勝手だなあ。話がうまくできすぎている。お前を本当に信じていいのか？」

「信じるかどうかはあなた次第だ。私も手を貸そう。いくぞ！あいつを倒す。」

そのとき、空から流星が降り注いだ。地面に落ちて、大爆発を起こす。ゲリュレイスの火炎弾とは比べ物にもならないほどの爆発だ。

「ちっ、あいつが起きやがったのか！？全員戦闘準備！！」

「お、初めてその台詞言ったな！」

「前から言ってみたかったんだ。最終決戦の始まりだ！！」

「おお！！」

戦闘開始

DMは、南の空からこちらの方へ飛んでくる。

「どこにいる、秀樹！！でてこい！！」

「ここにいるぞ、DM！！」

俺は、DMの後ろに飛んで、翼に向かって拳を突き出す。

「おりゃああ！！」

拳から、さっきの衝撃波が巻き起こり、DMに襲いかかる。DMは手に持った槍を落とした。俺は、そのまま空中で蹴りを入れて地面に降りる。

「龍平、怜治！その槍を持って！！お前らもそれで戦え！！」

「おい、秀樹、俺たちはどうするんだ！？」

修平と政宗が聞いてくる。

「後ろから援護しろ！！何か持っているんだろ！！」

「あ、ああ……」

修平と政宗は、腰につけていたフランキ・スパス12を手に持った。そのまま武器力解放。フィーニスは杖から、魔光弾を打ち出す。

「はああ！！」

杖から打ち出された魔光弾は、DMに直撃し爆発を起こす。

「きさまらぁ……明日の命はないと思え！！」

DMは、手から闇の光を出して鎌のような武器を作った。刃渡りが2m近くある大きな鎌だ。

「魔空閃！！」

DMは大きな鎌で薙ぎ払ってきた。鎌から、カマイタチのような衝撃波がたくさん飛んできた。

「俺たちに任せとけ！！」

大和と翔は、魔空閃に立ち向かう。

「おりゃああ！！」

計三本の刀で、魔空閃をかき消す。

「ほう、魔空閃をかき消すか。ならば、これはどうかな！？」

DMは自ら突っ込んできて、鎌で斬り掛かってきた。

「DM……。俺たちを忘れていないか？」

修平と政宗は、DMに弾丸を撃ちこむ。武器力解放をしている散弾がものすごい勢いでDMの体に食い込む。

「ゲハア!!! きさまら、死にたいようだな……」

二本の鎌が修平と政宗を襲う。巨大な刃が体に食い込み、血が流れ出す。

「修平!!! 政宗!!!」

龍平と怜治が、槍の先から、赤い光を生み出す。たくさんの光が、空を飛んでいく。

「フハハハ、何をしている、そんなものでは私を倒せないぞ!？」

「それができるんだなあ!!! ガトリングフレーム!!!」

その瞬間、たくさんの光が火炎弾となって、DMに襲いかかる。火炎弾は火柱となってDMの体を焼き尽す。修平と政宗は、そのまま地面に落ちた。

「な、なんだ？」

「ははは、お前の武器の技だぜ!?! なんて使えるかわかるか!?!」

「きさまら、『ドリームクライシス』は攻略済みか……」

「正解っ! きさまのやる事は大体わかるんだよっ!!! この武器の使い方も!」

龍平と怜治が時間稼ぎをしている間に、俺はDMの背後に回り、連続で拳を繰り返す。

「おらおらおらおらおらああ!!!」

DMは一瞬ひるんだ。その隙に、翔は空高く飛んだ。大和も、こちらに向かって走ってくる。DMはこちらに向かって全員を鎌で薙ぎ払ってくる。無論翔には気づいていない。

「一人じゃ勝てないよお!!! くらえ、雷神空!!!」

ゲリユレイス戦と同じように、DMの翼の付け根に刀を差し込む。

しかし、DMは体から放電し、翔はそのまま崩れ落ちた。

「翔! 大丈夫か!?!」

「大丈夫。ただ、ちょっとばかりめんどくさい奴だな…」

「一人では勝てないだと？ならば、こいつらを出してやるうー!!」
そのとき、DMの手が黒い光に包まれ、足下に魔方阵が現れた。

「いでよ、闇の戦士たちよ!!」

魔方阵から、漆黒の光が立ち上り、謎のうめき声が聞こえてきた。

その時、魔方阵の中からウルフェルベロス、ゾンビ軍団などが現れた。それも、ものすごい数が魔方阵の中から湧き出てくる。

「くそ、無駄な戦闘は避けたいんだが…」

「秀樹!! あいつらは俺たちで仕留めるから、お前らはDMをやれ!!」

修平と政宗、フィーニスが反撃している。

「でも…お前らだけで大丈夫か!？」

「俺たちをなめんなよ! そうだ、AK47を貸せ!!」

「わかった。龍平、お前のAK47も貸せ!! 予備マガジンもだ!!」

龍平は、AK47と予備マガジンを投げってきた。AK47を受け取ると、自分の腰につけているAK47を取り外し、修平と政宗に投げた。

「サンキュウ!」

「全員反撃開始!!」

「おう!!」

反撃開始

「DM、いい加減にやめねえか!？」

俺たち五人はDark Matterをし続けるDMに向かって総攻撃をかけた。

「全方向から畳み掛ける!!」

「うるさい!! ござかしいわっ!!」

DMはDark Matterの召喚をやめると、二本の鎌で薙ぎ払ってきた。全員その場から退避する。しかし、俺はそのまま突っ込んでいく。

「！？秀樹、逃げる！！」

「ははは、自ら死にくるなんてついに頭がおかしくなったのですか？」

「ふん、カウンターをするのが趣味でね……」

俺は、二本の鎌に向かって拳を突き出す。鎌と拳が激突して衝撃波が巻き起こる。そのまま飛んでフロントキックを食らわせる。

「おらあ！！」

DMはそのまま回転しながら飛んでいく。

「おめえら援護しろ！！」

「了解！！」

修平たちの方を見てみると、なんと最悪のDark Matterが召喚されていた。銀の龍ががれきを踏みつぶして闊歩してくる。

「ゲリュレイスを出しやがったか……」

そのとき、ゲリュレイスはこちらに向かって、火炎弾を乱射してきた。

「龍平、怜治！！あいつは任せた。大和、翔は俺といっしょにDMをぶっ倒すぞ。」

そのとき、龍平と怜治は既にゲリュレイスに反撃を始めていた。行動の早い奴らだ……修平たちもDark Matterを殲滅してゲリュレイスに攻撃し始めている。

「ゲリュレイス、そいつらを皆殺しにしろ！！」

「うるせえ！できるもんならやってみる！！」

龍平と怜治とフィーニスは、光の玉を上空に打ち出している。

「ガトリングサンダー！！」

光の玉は、上空で集まって一つの玉となり、DMとゲリュレイスに向かって大量の雷が落とした。ゲリュレイスに雷が直撃しその場に崩れ落ちた。DMは全ての雷を素手で撃ち落とした。

「どうした？こんなものでは私は勝てないぞ！？」

「わかつてるよ！」

大和と翔は武器力解放してDMに突っ込んでいく。龍平たちも後ろから魔光弾による援護射撃をする。

「二双龍刀奥義 紅蒼龍舞撃！」

その時、二人の背中から2頭の龍が現れて三本の刀と共にDMに襲いかかる。攻撃が激しくなるにつれ、透けていた二頭の龍がどんどん実体化していく。

「うおおおおおつつつ！！！」

二頭の龍がDMに噛み付き、動きを止めた所に二人が居合切りを繰り出す。二頭の龍は爆発し、DMはその場に倒れ込む。しかし、すぐに立ち上がり空へ飛び上がる。

「はぁ、はぁ…なぜだ！？なぜきさまのような凡人が私の前に立つ事ができる！？」

「あなたは彼らの強さの秘密がわからないのか？」

「フイーニスがDMの目の前に立ちふさがる。」

「きさま…出来損ないのDark Matterが！！なぜきさまがここにいる！？」

「だまれ！！きさまの考えにはもう飽き飽きしたわ！彼らのつながりこそが力だ！！」

「は？つながり？…フッフ、ハハハハ！！！」

「何がおかしい！？」

龍平が反論する。『そうだ。俺たちの力は、協力し救い合う力の塊だ！！』なんてかつこいい事言えるような立場じゃないが…

「フン、絆とか信頼とかそんなものこの世には全く必要のないものだ！！この世を支配するのは個々の力だ！！仲間など…邪魔でしかないわ！」

何を言っているんだこいつは…はっ、そうだ。こいつは今まで一人で戦ってきたんだ。仲間など、そう、仲間の必要性など全く知らないのだ。

「じゃあなぜあなたはDark Matterを生み出すのですか？あれはあなたの仲間ではないのですか！？」

大和がDMに質問する。確かに、DMの言葉と行動は矛盾している。DMは仲間を必要とほしくない。なのになぜDark Matterを生み出すのか？

「あれは仲間ではない。私の駒だ。私のために働くただの駒だ。」

「じゃあ、なぜお前は俺たちに勝てない？必要のない絆を持っている俺たちに勝てない？」

本当はこんな事は言いたくない。奴を挑発している事になるからだ。「それは、俺が完全ではないからだ。」

「どういうことだ？」

「もうDark Matterなど無駄いらぬ。全てを捨てて我が力のみでこの場を打破する。」

そうDMは言つて、Dark Matterを生み出していた魔方陣の上に立つと黒い光を立ち上らせた。

「さあ、最終決戦の始まりだ！！」

黒い光は爆発し、全てを飲み込んだ。

魔方陣から立ち上る光が爆発した。というのは間違つた表現かもしれない。周りを見ると何も無いというよりは、全てのが黒一色に染まつて太陽が沈んで月が昇つた。月の光で、黒に染まつたがれきが輝いている。黒い球体が遠くの方に浮いている。球体はどんどん膨張して、ひびが入っていく。日々から血のようなどす黒い赤色の光が漏れてくる。

「あれは、DMなのか？」

「秀樹、あれがDMの真の姿です。DMも今まで押さえていた自分の力を解放して、全力で私たちにぶつかってきます。気を緩めないてください。」

そのとき、黒い球体は卵が割れるように崩れ落ちた。そして、空には赤い光の玉が一つ。赤い液体のようなものが流れ出て地面に落ち

て消えていく。

「なんだかきたねえなあ…」

政宗が言葉を漏らした。確かに、あれはかなり怪しい。

「ていうか、今のうちに攻撃すればいいんじゃない？」

「!?! た、確かに…」

修平の言葉に全員ちよつとあきれたような感じになったが、すぐに気を引き締め、全神経を赤い光の玉に全神経を集中させる。

「全員、DMを倒すために、自分の全ての力を使い切れ!!この戦闘で全ての決着を付ける!!」

「おお!!」

戦闘開始

全員DMを中心に正八角形に布陣して遠距離攻撃による総攻撃をかける。弾丸や魔光弾による攻撃がDMの玉に直撃する。

「やったか!?!」

「いや、まだだ…」

赤い光の玉は未だ健在だった。そして、全ての赤い液体が流れ出てさらに恐ろしい姿になったDMが現れた。まさに、龍が悪魔となつたような姿の巨大な緑色の龍。その禍々しい姿の龍は、ゲリュレイスとは比べ物にはならない威圧感を放っていた。

「きさまらはここで殺す。」

「…、ちゃんとしやべれないのか?なんだか迫力に欠けるな…」

「あいつは真の姿になると、やや知能が低下して、半分暴走状態になってしまいます。その分、かなり厄介な相手になっています。」

案の定、DMは俺たちの方へ突っ込んできたが、おれたちが避けた後も走りつづけて、

がれきに足を引っかけて体を地面にこすりつけながら止まった。

「そんなんで俺たちに勝てると思うなよ!!」

修平と政宗はDMの上に飛んで弾丸を撃ち込んでいく。しかし、ゲ

リユレイスもしかりあいからわず恐ろしいほどの堅殻で弾丸は弾かれてしまう。しかも、武器力解放した弾丸が傷つける事すらできないのだ。

「あれは一体どんな物質だよ!?!」

二人はあまりの固さに困惑している。

「大和、ゲリユレイスの時と同じ作戦でいくぞ!!--」

「了解!!--」

大和は、封滅突 龍火とはややちがう下段の構えになっている。

翔は、龍刀 蒼雷に電気を溜めている。超雷粒砲を撃つようだ。

「封滅突 神壊!!--」

大和は、DMの顎を貫こうと下段から突き上げる。

「おりゃああああ!!--」

しかし、ゲリユレイスとは違い顎の筋肉の所も恐ろしい堅さになっているようだ。大和は、一旦退こうとしたが、あまりの恐ろしさにDMの前で尻込みしまう。

「なっ、一体どんな構造になっているんだ!!--」

DMは、大和の事を睨みつけると一歩下がって宙返りをした。大きな尻尾が大和を襲う。翔も一体何が起きたのかわからず、そのまま地面に落下してくる。

「!?!...な、サマーソルトだと!!--」

大和は、その真上に打ち上げられて、DMに飲み込まれてしまった。

「フッフ、後7人!!--」

「ウソだ!!--そんなのウソだ!!--」

翔は龍刀 紅炎を握ると放心状態に陥ってしまった。完全に棒立ちになっている。目には生気が感じられない。まるで死人のような顔をして完全に血の気が引いてしまった。

「くそっ、翔おまえはDMを倒す事だけ集中しろ!!--さっきまでのDMとはまるでちがう!お前も倒されてしまうぞ!!--」

「無駄です。あなた方はもうここで死んでしまうのです。現実世界でこの世が滅びていくのを指をくわえて見ていてください!!--」

DMは、ゲリユレイスが火炎弾を打ち出すときにする構えになった。首をゆっくり上に上げ、何かを打ち出そうとしている。

「ファイナル：ジャツジメント！！」

DMの口から黒い漆黒の魔光弾がこちらに向かってくる。

「俺が撃ち落とす！！」

龍平が魔槍アルメテウスを持って、ファイナルジャツジメントに突撃する。槍の先端から、黄金の鬨気が波を撃つように迸る。空を裂き、真空刃巻き起こしながら、漆黒の魔光弾を撃ち落とす。

「空滅突貫！！」

ファイナルジャツジメントを槍が貫き、大爆発が起きる。爆発ががれきを吹き飛ばし、俺たちの方へ飛んでくる。

…翔はまだ放心状態のままだ。これ以上放置しているとかなり危ない。どうにかしなければ…

「翔！！意識があるんだっいたら逃げろ！！」

声をかけるが反応を全く示さない。

「今がチャンスのようなですね…二人目といきましょうか！！」

DMは翔に向かって突進する。口を開き翔を噛み砕こうとしている。そのとき、翔がDMの鼻先をつかんだ。DMは完全に速度を失い、空中に浮いている。翔の目には憎しみや怒りなど様々なものが浮かんでいた。

「……ふざけやがって。大和を、俺の仲間は何をしてくれるんだあ！！」

翔は、顔を上げるとDMを睨みつけて、全身からものすごい量の紫色の光を発した。それは、上空へ立ち上り渦を巻いている。空気がものすごく緊張したものになり、かなり深い水の中にいるような強い圧迫感がある。

「ふざけるなあ！！」

翔は腕を振り上げると、DMを地面に叩き付け、そのまま投げ飛ばした。

「武器力解放：あり得ないほどのエネルギーを生み出しています。」

「これほどの闘気は、私も見た事がありません。」

「フィーニスは、半分震えながら俺たちにはしゃべってくる。DMは立ち上がり、フィーニスを睨みつける。」

「きさま：私の邪魔だけでなくよけいな事までしおって…きさまから先に殺してやるわ！」

「DMは大きな翼で飛び上がり、遙か上空へ行ってしまった。」

「一体何をやる気だ…？」

そのとき、空に無数の光が現れた。それも、空を埋め尽くすほどの光だ。

「星！？ちがう…流星群だ！！かなり規模がでかいぞ…！」

地面に流星が降り注いだ。それはさっきの攻撃の、数も規模も段違いの攻撃だった。

「こざかしいわあ！！そんなものせずに、自ら来んかい！！」

俺は、両腕に力を込めて、360°全方向に向かって、拳で乱打した。衝撃の波が、流星を破砕していく。遠くの方から、DMが飛んで降りてくる。俺は一度地面に突いて再度跳躍する。

「これ以上戦闘を長期化させたくない。全員次の一撃で決めるぞ！！」

そう言いながらDMの真上にまで飛ぶと、翼の間接を連続で殴る。衝撃が筋肉を走り、DMはバランスを崩して落下する。俺は、DMを踏み台にしてかなり高くまで飛ぶと落下の速度に加えて背中から衝撃波を発生させて、落下中のDMに向かって渾身の一撃を食らわせる。DMが地面に付いた瞬間、音速を超える拳がDMの堅い殻を打ち砕く。その衝撃でDMは地面から浮き上がり、目は完全に白目を剥いていて失神しているようだ。

「秀樹、そこから離れる…！」

龍平から警告が飛び、そのまま龍平たちの後ろへ退避する。

「魔光弾発射応用奥義 マジックストーム…！」

龍平、怜治、フィーニスの生み出した巨大な魔法力の塊が、嵐のようにDMに向かっていく。

「俺たちはもう力を使い切った。とどめは翔、任せたぞ!!」

とどめは翔にかかっている。翔は、龍刀 蒼雷を手にして、背中に龍刀 紅炎を刺している。その瞬間、翔の姿は消え、DMの真下にいた。

「…双龍刀術奥義 天昇撃!!」

DMの胸あたりをえぐりながらDMの上に飛んで、刀を鞘にしまった。背中から龍刀 紅炎を抜き、気を一点に集中させた。

「この一撃を大和に捧ぐ…龍刀術奥義 羅翔紋!!」

翔の背中から翼があらあわれてDMの頭から尻尾までを一閃する。

翔は地面に着地して腕を空に向かって突き上げた。

「大和、仇とれたよ…」

指を鳴らすと、DMは体の真ん中から出血して崩れ落ちた。

「大和、仇取ったぜ…」

翔は、刀を鞘に納めてDMを見ながらしゃべった。

「くっ、この私がただの人間に屈するとは…」

倒れていたDMはまだ生きていたようで、こちらの方を睨みつけてきた。

「きさま、まだ生きていたのか!?!」

全員びつくりしてDMの方を見つめる。体からどす黒い血を流し、息を荒げている。

「私が死んでも、後に残ったものが全て滅ぼす。この腐れきった世界を滅ぼす。それが、た少し遅くなっただけだ…」

「後に何が続いたとしても、俺たちが全て阻止する。腐れきった世界だろうがなんだろうが知らねえ。てめえの持論に振り回されてたまるか…」

翔は、半分涙目になりながら誓う。仲間を奪われて感情が押さえきれなくなっているのだ。

「フ、きさまらがいればこの世界は安心かもな…」

そう言うと、DMは体から、金色の光をあげて消えていく。周りにいたゾンビやゲリユレイスの死体も少しずつ消えていつている。

「お、おい、ファイニス。なんでお前も消えるんだ!？」

俺たちの後ろにいたファイニスも、金色の光をあげて消えていつている。よく見てみると、周りの世界も少しずつ消えていつている。

「DMの力によってできた全てのものが、全て消えていくようです。私もDMの生み出したDark Matterです。私も消えていく運命なのですね。」

自分が消えていく運命を悟ったファイニスはとても優しい顔だった。こんな顔は今までで見た事がない。

「そうなのか…今までいつしよにいてくれてありがとう。」

「私もあなた方に会えてよかった。」

そう言つてファイニスは消えていった。戦いは終結して夜が明けていく。周りの世界には、色がついていく。世界はただのがれきの山となった。

「世界の終わりではない。新しい世界の始まりだ。」

そう言いながら翔は、龍刀 紅炎をDMの頭に差し込んだ。大和の供養のつもりだろう。

「あのさ、ここで死んでも現実世界では生きているんじゃないのか？」

まさか、修平がこのタイミングでこの言葉を言うとは思わなかった。翔は修平の方を見て、しばらく黙った。怜治が修平の事を思いつきり殴った。

「翔の気持ちを考えろよ!!本当に空気の読めない奴だな!!」

「もういいよ、怜治。大和の事はいい。生きている事は確かなんだ。それで十分だ。」

翔が怜治を押さえつける。その時、DMのいた所で声がした。

「翔、本当に生きているぞ。俺は生きているぞ。」

そこには、戦闘服を脱ぎ捨てた大和が立っていた。DMに食べられ

て、死んでしまったはずの大和がそこに立っている。

「や、大和、本当に大和か？」

翔は、いきなり現れた大和を見て放心状態になってしまっている。

「奇跡だな。ギリギリ消化されずにこの場に戻って来れたよ。翔、心配かけてごめんな。」

翔は、泣きながら大和に抱きつく。

「お前気持ちわりいなあ、離れるよ。」

「だって…まあいいや。すまねえな。」

翔は、大和が離れた。気づいたときには、俺たちも体が薄くなっていく。

「おい、大和。聞いてえことたくさんあるぞ！！」

翔は叫ぶが、全員どんどん消えていっていく。

「また明日だ。明日は必ずくる。」

朝、目が覚めて世界は平和だった。何もこともない朝がまた始まった。

「さあ、学校に行くか。俺の仲間たちに会いに。」

制服に着替えて学校への道を走る。風が吹き付けていく。心地の良い朝だ。

学校着くとみんながいた。というよりは、みんながいつしよに学校に着いた。何かに引き合わされたように。もちろん、裕一郎…DMはいない。

「……しゃべる事ねえな。もう言いたい事は言い切った。そんな気がする。」

龍平が言った事は、みんなも感じていた。これが、以心伝心というなのかもしれない。

「じゃあ、一つだけ聞きたい事がある。大和、なぜ戦闘中に不機嫌だったんだ？」

翔は、大和の目を見て質問する。やまとは、しばらく黙った後、口

を開けた。

「翔の強さがうらやましかった。ただそれだけだ……」
「思いもよらない答えに全員大和を見つめる。」

「お前の方が、強いんじゃないか？」

「…政宗、それは、一刀での話だ。実際の戦闘の実力では、翔の方が遥かに俺を勝っている。それがくやしかったただけだ。」

大和のプライドが、翔の強さによって傷つけられていたようだ。

「お前も強くなれ。そのために俺が稽古を付けてやるうか。二刀流のな！」

翔が大和に発破をかける。それが大和の闘志に火をつけたようだ。

「けっ、きさまに稽古つけられるぐらいなら、そのうち俺がきさまをぶっ倒してやる。」

「まあまあ、二人とも決着はLPSで着けようぜ。」

「おっ、なかなか言うな龍平…！一回俺たちに負けているくせに。てめえも切り刻んでやる。」

「やってやるうじゃねえか…！」

みんなで盛り上がる。何事もないこの平和な朝はまた明日もやってくるはずだ。

「君たち楽しそうだね。僕も入れてよ。」

そこにはDM…裕一郎が立っていた。というよりは、DMよりやや威圧感がなかった。

「DM！？なんでこんな所に!？」

「？DMって何の事？何それ？」

全員身構えたが、そこにいる人物は、首を傾げて聞き返した。全員顔を見合わせる。

「お前、ゾンビが学校にでたって知っているか!？」

この前の事件の事だ。

「ウソでしょ。そんなわけないよ。」

つまり、DMが起こした事は全てきれいまつさら無くなっていたという事だ。裕一郎も、偽物の裕一郎だっただけで、ゾンビがいた事

も全て記憶の中から消え去ったという事だ。

「フッフ、ハハハハ！それは本当だよ。少し前の世界ではね！！」

「何の事、前の世界って？」

裕一郎が聞いてくるが、説明してもわからないだろう。

「何でもない！さあ、授業が始まるぞ！！！」

もうすぐ授業の始まりだ。そして、彼らが引っ張っていく新しい世界の始まりでもある。

ナイトメアゲーム 閉幕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4997y/>

ナイトメアゲーム

2011年11月18日08時50分発行